

G&T社長・竹内宏の 磨き作業が楽しくなる! 失敗しない 磨き術 ー試行錯誤の磨き体験記よりー

竹内宏 (たけうちひろし)

ジーアンドティー代表取締役。1961年生まれ。1980年にマツダオート大阪へ入社し、1984年に独立し保険代理店兼中古車販売業を営む傍ら、カーディテリングに触れる。1987年に廃業し、テロソソコーポレーションのグループ会社にカーディテリングの本部社員として入社。大手カー用品店にコーティングビジネスを提案し、自らも実験店で現場作業に従事する。その後自動車補修用品の営業経験を積み、2003年に再び独立してジーアンドティーを設立。サンマイト社サンドペーパーの東日本代理店として磨き関連商品を販売しながら、講習会を積極的に開催するなどアフターケアを重視した営業手法を展開している。



[第4回] 作業する塗膜のコンディション確認と正しいポリッシャーの持ち方・動かし方

不十分な強制乾燥 これが最も多い 磨きトラブルの元

前回は、一例を挙げて作業の流れを説明しましたが、今回は、より具体的に各作業での留意点を解説していきたいと思います。

まず、これから作業する塗膜をよく把握することが大切です。

劣化した塗膜なら塗膜の上にどのような汚れが付いているか、補修塗膜なら乾燥状態がどうなのかが重要です。塗膜の磨きについては、また改めて解説しますので、ここでは補修塗膜につ

いて話します。

前回、塗膜の硬さについて触れましたが、「硬い、軟らかい」の区別以上に、乾燥状態が作業性に影響する度合いは大きいと思います。

例えば、営業でデモンストレーションを行った際、最初は普通に磨けるのですが、段々とバフの回転が重くなり、引っかかるような感触になることがあります。お客様には分からないように、力加減を調節してスムーズに磨いているように見せるしかないので、しっかり仕上げてからでなければ言い訳もできないので苦労します。

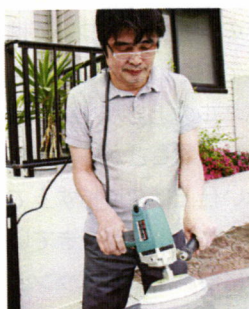
後で乾燥状態について質問すると、

大抵の方は「しっかり〇〇分炙りました」、あるいは「ブースで〇〇分乾燥させましたから…」という答えが返ってきます。しかし、私の経験上では、しっかり乾燥した塗膜なら途中で急に絡み出すことはないはず。初めから絡む場合は明らかに乾燥不足です。

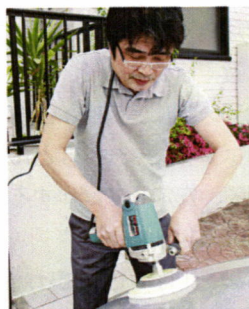
その場合はお客様も自覚している場合が多く、指摘しても嫌な顔はされずに、むしろ乾燥機器や温度設定についてアドバイスを求められることのほうが多いのです。厄介なのは、お客様は充分乾燥していると思っていながら、実は乾燥不十分な場合なのです。

では、なぜそんなことが起きるのでしょうか?

原因は、クリーヤーの塗り過ぎやベースコート乾燥不良、各作業のセッティング時間が不充分、などが挙げられます。しかし、意外と単純に強制乾燥不足の場合も多いようです。「しっかり炙ったはずなのになぜ?」という話ですが、よくよく聞いてみると炙ったのは短時間で、その後長い時間が経過しているから大丈夫だろうと考える人が多いようです。また、塗装ブースで乾燥した場合は、室温は上がっていてもパネル温度が上がってからの実質乾燥時間が不充分だったりします。パネルヒーターで規定時間炙った人も同



ハンドルの後ろ側を持ち、テコの原理を活用して最小限の力で動かしながら、しっかりと脇を締め、スイッチをロックボタンで固定すれば、安定してポリッシャーを操作できる



反対に、スイッチを人差し指で引いた状態のまま、脇が空いた状態でハンドルの前側を持てば、力がしっかりと入らず余分な操作力が必要となるため、不安定かつ疲れやすくなる



左右に移動させる時、動かしたい方向のハンドルを軽く押さえ、ポリッシャーを動かしたい方向に身体を傾けながら、脇を締め上腕部で操作すれば、長時間作業しても疲れにくい



ドアパネルの上側を磨く際は、しゃがんでから片膝を地面に着ける。下側を磨く際は、身体は立った状態のまま、補助ハンドルを逆手で持ち上に向ければ腰への負担も少ない

様、パネル温度の管理が不十分なケースが多く見られます。

塗料メーカーは「〇〇分で磨けます」とPRしますが、それは磨くのが「可能」と言う意味です。上記の要因で強制乾燥にムラがあることも計算に入れると、何割かは多めに乾燥させなければ、適切なコンディションにはならないのです。赤外線温度計などで表面温度を測り、ヒーターの距離や角度を調整してみると、効率が上がるはず

です。磨きは、過ぎるより足りない方がまだ良いのですが、乾燥は足りないより過ぎるくらいの方が良いと思ってください。乾燥し過ぎれば硬くなり磨けなくなると心配される方もいらっしゃいますが、長く放置しなければ大丈夫です。少々硬めの方が、若干削りにくくはなりますが、仕上げは楽です。

クリヤーの種類によって乾燥具合に癖がありますので、程良いポイントを把握することが重要です。塗膜のコンディションが悪ければ、良い磨き製品

も良くないと感じ、逆に本来良くないものが使いやすく感じたりします。材料の選択はまず、塗膜のコンディションを整えてから判断する必要があります。クリヤーの乾燥特性については、メーカー・製品ごとに特徴がありますから、今一度よく確かめてください。

スムーズかつ均一な磨きは正しいポリッシャーの持ち方・動かし方から

心置きなく磨ける準備ができましたら、次にポリッシャーの使い方を説明したいと思います。ポリッシャーの持ち方・動かし方にも、効率の良い方法があります。

なお、外国製品には今でも横置きタイプの多いですが、このタイプは構造上低重心で安定していて、普通にハンドルと胴体を持てばよいので、細かい説明は省かせていただきます。国内で流通しているポリッシャーはほとんど縦置きですので、安定して操作するには持ち方が重要になります。

まず、補助ハンドルはできるだけ端に近い後ろ側を持つようにします。そして本体のハンドル部分もやはり、端に近い後ろ側を持ちます。スイッチは本体の中心に近い位置にあることが多いので、ロックボタンで固定してスイッチから手を離して持ちます。

モーターに近い部分を持つ方が安定

するようには思いますが、長時間作業すると疲れてきます。端で支えてバランスを取れるようにすると余計な力が入らず疲れません。慣れればポリッシャーを、よりスムーズに動かせます。ポリッシャーがスムーズに動くということは、磨き傷も均一になるということです。

左右に移動する時は、バイクの運転でハングオンする時をイメージしてください。動かしたい方向のハンドルを軽く押さえると、自然にポリッシャーはその方向に移動します。手先にはあまり力を入れず、脇を締めて上腕部で操作するイメージです。色々な持ち方を試しましたが、これが一番楽で磨きやすいと思います。1日3台全磨きすると、よく分かりますよ（笑）。

磨く場所によっては少し持ち方を変えた方が楽ですので、それについては写真を参考にしてください。コンディションが整ったパネルの上でポリッシャーをスムーズに動かすことが、バフ目やオーロラのない仕上げを目指す上での基本条件です。この準備ができていなければ、いかに優れたコンパウンドやバフを使っても、良い仕上げを得るのは難しいのです。

ここまでの内容をご理解いただいた上で、器具・材料の特性や性能について注目しましょう。次回は、私自身が実際に使用したものの感想も盛り込みながら、解説したいと思います。（続く）



ビラーやフロントフェンダー先端など細い箇所を磨く際は、バフが部分的にしか当たらず不安定になりやすいため、より強く脇を締め安定させる